

小学校英語の教育方法

ー主体的な学びを育てるためにー

戸谷 敦子

広島都市学園大学 子ども教育学部

要 旨

本稿は、子ども達が主体的な英語学習者に育つための教育方法について実践事例を引用しながら論じた。外国語の習得には長期的な取組が必要である。小学校から始まる英語教育において、子ども達が自ら主体的に学ぶようになるには、教師は授業で英語に興味関心を持たせ、知識を教えるとともに、外国語の学習の仕方についても学習させる必要がある。また、子ども達が達者な英語話者へと伸びていくために必要なスキルを授業内で教えることも大切である。本稿は国内外のESL (English as Foreign Language) 事例の中から筆者が好事例とみなす授業実践について紹介した。具体的には、学習の仕方を学習する、自分自身で学習していく能力を身につける、体験を通して興味関心を育てる、の3つをテーマとした。

キーワード：小学校英語，教育方法，ESL，effective learning，フォニックス，体験的学び

1. はじめに

2020年4月から小学校での英語教育が本格始動する。これまで5，6年生を対象としていた外国語活動が3，4年生に前倒しとなり，5，6年生では成績評価を伴う教育科目としての英語の授業が始まる。母語とは異なる言葉を学ぶことで，言語の面白さに気づき広い世界に目を開くような，豊かな学びの扉が開かれることを期待したい。

しかし，これまでの英語教育についてはその結果に課題が指摘されてきた。第2期教育振興基本計画（平成25～29年度）（文部科学省 2013）では，中学校卒業段階で英検3級以上，高校卒業段階で英検準2級から2級以上の生徒の割合を50%とする成果指標が設定されたが，2017年に全国の高校3年生約6万人を対象として実施された英語力調査の結果（文部科学省 2018）では英語4技能すべてにおいて達していなかった。結果で明らかになったのは，CEFR¹（ヨーロッパ言語共通参照枠）のA2レベル以上（準2級以上相当）の生徒の割合は，「聞くこと（33.6%）」「話すこと（12.9%）」「読むこと（33.5%）」「書くこと（19.7%）」と低く，特に「話すこと」と「書くこと」は，無得点者もそれぞれ18.8%

1 Common European Framework of Reference for Languages は，第2言語や外国語の教育における目標，内容，方法を明白に説明するための共通基盤とすべく開発された。40か国語に対応している。

と15.1%であった。

一方、鳥飼（2014）が指摘するように、学校での授業のみで外国語をマスターするのは難しい。鳥飼は、米国国務省FSI（US Department of State, The Foreign Service Institute）による外国語学習の難易度のランク分けで日本語が「英語母語話者にとってかなり難しい」カテゴリーに設定されており、日本の学校現場での英語授業時間数は、FSIが「集中訓練」に必要とする時間数の半分にも満たないことを明らかにしている。

第2期教育振興基本計画では、その成果指標として「国際共通語としての英語力の向上」を謳っている。英語の習得には長期的な取組が不可欠である。3，4年生に早められる英語教育において、子ども達が母語とは異なる言語や文化に興味関心を持ち、主体的に学びを発展させてほしいと願う。そのためには、教師は授業で英語の知識を教えるとともに、外国語の学習の仕方についても学習させ、自立した英語話者へと伸びていくために必要なスキルを教えることが大切である。本稿は、国内外の実践事例の中から、主体的な学びを育てる好事例について紹介することを目的とした。

2. Moonによる「学習の仕方を学ばせる」実践について

Moon（2005）は、著書Children Learning Englishの中で学習の仕方を学習させるために、授業運営など自分たちが受ける授業についての児童の気づきを高めることが重要であると説いている。児童が毎日の学習活動に慣れ親しむことが大事であり、それは学ぶ楽しみに大きな違いをもたらすとする。以下は、活動の2つの例である。

（1）絵表示（ピクチャーシンボル）を使った学習活動で児童の「気づきを高める」

① 授業で使う絵表示を決める。

教科書で紹介される学習活動を示すピクチャーシンボルがあれば、それらを活用する。もし教科書にない場合は、シンプルな絵表示を考案すると良い。

（下の表1 a は、文部科学省作成の「新学習指導要領対応Let's Try! 1」に使用されているピクチャーシンボルの内容例である。教科書に模した色や字体でカードを作成し、黒板に貼ったり、手で表示したりして授業に使うことができる。）

表1 a 「Let's Try 1」の絵表示の内容例

Let's Listen	→「聞いてみよう」	Let's Chant ♪	→「リズムに合わせて言ってみよう」
Let's Watch and Think	→「えいぞうを見て考えよう」	Let's Sing	→「英語で歌おう」
Let's Play	→「ゲームをしよう」	Activity	→「考えや気持ちをつたえ合おう」

出典：文部科学省（2017）「新学習指導要領対応Let's Try! 1」目次頁より

② ピクチャーシンボルについて児童に考えさせる。

ピクチャーシンボルを児童に見せて何を意味しているかを話し合わせる。以下は想定される会話の例である。

T（教師）：（子どもの耳の絵を見せ）これは何ですか？

S（児童）：耳です。

T：そうですね。みなさん耳で何をしますか？

S：聞きます。

T：その通り。これは何ですか？（子どもの書いた絵を見せる）

S：絵です。

T：そう、絵が描かれています。今日は皆さんに聞いてから書いてもらいます。

③ 実際に活動を行う。

例：児童は教師の説明を聞いて、風船を描くなど。

④ ピクチャーシンボルの復習をする。

最後に、ピクチャーシンボルを見せて児童に今日やった活動を思い出させる。

⑤ ピクチャーシンボルを思い出させる。

次に「聞いて書いてみよう」を行うときは、シンボルを見せてから児童に今日は何の活動をするのかを尋ねる。

⑥ ピクチャーシンボルを定着させる。

児童が授業で行った活動を表すピクチャーシンボルを指で差し示したり絵に描くことで、教師に伝える活動を数週間行った後、教師はそのシンボルを壁に貼って授業でいつも使えるようにする。

⑦ ピクチャーシンボルを増やしていく。

教科書のその他のピクチャーシンボルや、別途用意したピクチャーシンボルを児童に紹介していく。

⑧ ピクチャーシンボルを発展させていく。

児童がこれから授業でどんな活動をするかについてのアイデアを話すことに慣れてきたら、教科書の活動でピクチャーシンボルの無い活動（例：読み聞かせなど）について、児童に見つけさせたり、自分でそのピクチャーシンボルを描かせたりする。学年の高い児童は、いくつかの面白いシンボルを考案するかもしれない。

⑨ ピクチャーシンボルを使って児童が授業づくりに参加する。

その後、週に1回は児童達が自分たちで行いたい活動を選ぶ授業を持つ。児童は各グループ1つずつ活動を選ぶ。このように、非常にシンプルな方法で児童が彼らの学びを管理運営することに参加していくようになる。

（2）strategyについて児童の気づきを高める

Moonは、児童は授業の中であまり意識することなしに様々な活動を行っている、例えば、クロスワードパズルを完成させたり、空欄をうめたりする時も、かれらの関心は活動そのものか、そのアウトプットに置かれていると指摘する。そこで、学習の仕方を学びながら学びを更に色々と発展させていくには、児童ら自身がどのように学習課題をやり遂げ

ているのか、そのstrategy（戦略や方略）について気付く必要があると主張する。もしこれを他の児童達と分かち合うことが出来れば、strategyの幅を広げることが出来るからである。

著書では、Wall dictionary（壁の辞書）を使った授業例で、strategyについての気づきを高める方法を示唆している。対象は8～9歳の児童で、Wall dictionaryを使って辞書の引き方を学ばせる工夫である。Wall dictionaryは児童が既に習った単語から出来ており、目で認識したり、ライティングで使用したりするために作られている。児童が新しい単語を習ったら、壁の辞書に加えられ、アルファベット順に単語を置くことは児童は学習済みである。Moonは、授業を構成する際に、①教師のねらいは何か、②児童になぜその活動をするのかをきちんとわからせているか、③どのようなstrategyがその活動を進行する上で必要かについて、児童の気づきを高めているか、の3点が重要であるとする。以下は、そのMoonの実践例を訳したものである。

（教師は児童をWall dictionaryの近くに半円形の形で座らせる。）

T：今から何をしようと思う？

S 1：辞書です。

T：そう、良い勘ですね。今日はWall dictionaryの使い方について学習します。

T：私達は今、魔女と猫の物語を書いていますね。でも、私は魔女（witch）をどう綴れば良いかわからない場合、どうしたら良いですか？

S 2：w-i-t-

T：素晴らしいです、チャンドラ。あなたは綴れますね。でも他の人は綴れないかも。たぶん、まわりにあなたみたいに助けてくれる人が誰もいないなら、わたしはどうしたらよいかしら。

S（複数）：辞書を見ます。

T：そうですね。単語をどう綴れば良いかわからない時、辞書を使うとわかります。では、探すのを手伝ってください。私はどこを見ればよいですか？

S（複数）：そこそこ。（Wの場所を指差しながら）

T：どこを見れば良いか、どうやったらわかるでしょうか？

S 3：最初の文字を見つけるの。

T：そうですね、良いスタートです。Witchの最初の文字は何ですか。

S（複数）：W。

T：はい、それでは、どこに行って文字を見つけられる？

S 1：あそこにWの文字が。（児童はwall dictionaryを指差す）

T：はい、手伝ってください。どうすれば良いのか見せて。（児童はWの欄に行き、文字を指し示す。）

T：ありがとう。彼はどうやってみつけたの？Wの欄にはたくさん単語がありますよ。

S 1 : 2 番目の文字がiだから、wiのところまでリストを下がっていきました。それで見つけたのです。

T : 上出来ですね。なぜ辞書の中で単語はこんな特別な順番に置かれているのでしょうか。

S (複数) : 簡単に単語を見つけるためです。

T : そうですね。その方が早いですね。もっと他の例もやってみますか？ あなた達が単語の見つけ方を教えて下さいね。

(いくつか他の文字でも行った後、教師は書く課題を与える。)

T : では、いまから皆さんのお話の続きを書いて下さい。もし、綴れない単語があったら、どうすれば良いですか。チャンドラ？

S 2 : 辞書を使います。

T : そうですね。でも、なぜそうした方が良いのでしょうか？

S : 他のクラスメートや先生を邪魔しないからです。

T : はい、辞書をつかうことは、あなた自身で課題をやる方法を学ぶ助けになりますね、自立した学習者になるためにね。

Moonが授業を構成する際に重要とする3点について検討してみる。まず、「教師のねらい」はWall dictionaryを通して辞書の引き方を学ばせることである。次に、「なぜその活動をするのか児童に分からせる」ために、教師は、児童が自ら理解し解決できるような場面を作り、対話を通して児童達から答えを導き出している。その上で、すべての児童達に「はい、そうですね。単語をどう綴ればいいのかわからない時、辞書をつかうとわかります。」と活動の目的を改めて強調している。また、「strategyについての児童の気づきを高める」については、児童達との対話（例：では、探すのを手伝ってください。私はどこを見ればよいですか？どこを見れば良のか、どうやったらわかるでしょうか？等）と活動を通して、辞書を使う時人が無意識的にとっているプロセスを具体化・明確化し、そのstrategyについて児童が気付くよう支援している。

Moonは、児童に何をするかを伝える際に大切なのはただ教えるのではなく、教師のサポートを受けつつ児童自らがやるべき課題をやり遂げることでであると主張する。上の事例は、教師は最近行っているstory writing（物語を書く作業）の延長として進めているが、実際、児童はこのライティングの際に文字を綴ることに助けを必要としており、辞書を使う必要がある。これが活動に現実的な意義深さを与え、児童の参加を促進し、理解を深め覚えることにつながると説く。教師に導かれながら、子ども達はどのようにして辞書をひくのかについて話し、実際に壁の辞書を使って活動を行う、そして辞書を使う理由についても考えている。Moonは、初期にはプロセスを明確化してやる必要があり、児童が理解し練習することで最終的にはそのプロセスを内在化できると主張する。また、関連の活動をするときは、児童が出来る適切な課題や方法を、頻繁に思い出させる必要があること、そうす

ることで、児童はstrategyを新しい状況（課題・作業）に発展させていくと述べている。

また、Moonは教える際の使用言語について厳格さは要求していない。児童の理解に合わせて母語を使っても良く、それが辞書の引き方の学習や他の活動を効果的に行うことを助けるのなら時間の浪費ではなく児童の将来への投資だと述べている。

3. HoskinsによるRecycleの重要性と音声指導の試み ～自分自身で学習していくために必要な能力を身につける

(1) Recyclingの重要性について

Hoskins (2014) は、児童の外国語学習について、recycling（繰り返すこと）、reinforcing（補強すること）、building（構築すること）の重要性を説いている。また、counter-intuitive（反直観的）に聞こえるだろうがとしながら、“Teach less to help young learners learn more”，教えることを少なくして、児童達にたくさん学ばせることが大切だと主張する。

Hoskinsは、教師は保護者や管理職を満足させるため、児童に語彙や文法などたくさんのことを教えるプレッシャーを感じており、教科書を速やかに進めることが成功の目安になっていると指摘する。しかし、児童達が素晴らしい進歩を見せるクラスでは、新しい言葉の紹介は比較的少なく、教師は既に習った言語を活発に繰り返し、授業時間のほとんどの時間を新しい言葉と慣れ親しんだ言葉の両方を繰り返し使うことに費やしているとする。

もし教師が授業の大半を、教科書を開いて言語学的な説明に費やしても、児童達は次の時間にはほとんど覚えていないであろうし、結果として同じことを何度も教えることになるであまり進歩はない。反対に、教師が授業の中で言葉のrecycle（繰り返し）を行う時、知っている言葉をどのように使えば、まだ知らない言葉表現することができるのかを教師は児童達に示すことができる。それは、熟達した英語話者が使う最も重要な能力のひとつなのだと指摘する。

Hoskinsは、教師は児童に必要な英語のすべてを教えることは出来ない、だからこそ児童が自分自身で学習していくために必要な能力をしっかり身につけられるように教えて行かなければならないと強調する。それを形作る最も簡単な方法の1つは慣れ親しんだ文脈の中で新しい言葉を紹介することで、それは別の見方で観れば、児童が習得するために時間を費やした言葉の価値を最大限に利用することだと指摘する。

慣れ親しんだ単語やフレーズを使って新しい単語を紹介することで、児童の学習を助ける方法例として、Hopkins (2011) は執筆した教科書Let's GOを紹介している。あるページには4つの単語（a CD, a video game, a cell phone, a computer）とそれぞれの複数形（CDs, video games, cell phones, computers）が上段に、下段にはそれらを含んだ会話（“What's this?” “It's a CD.” “What are these?” “They're CDs”）がイラストとともに記載されている。この内容をもしrecyclingなしで教えるならば、児童にとっては8つの新出単語と2対の対話文という厚みのあるレッスンである。しかし、言葉のrecyclingを取り入れることで、レッスンは学習し習いやすいものになる。例えば、児童が既に複数形というコンセプトを習っ

ており、複数形の__sは単語の後ろに加えることを知っているならば、ただそれを思い出すだけで、再度学習する必要はなく、それは言語修得の負荷を4つの新出単語（及びその複数形）に減少させると説明する。また、“What's this?”, “It's ~” が既に児童達にとって親しみのあるパターンであればrecyclingすることで、複数形を扱う新しいパターン（“What are these?”）を理解するのは、小さなステップですむ。新しく教える言葉の量を抑えることで、既に学習した言葉を練習する時間を多く持つことも重要な点にあげている。疑問文や回答文を使ったり、興味関心のあるトピックについて対話文を作ったりするのは、言葉を自分のものにしていく作業であり、自分で書いた文や（例：“This is my bedroom. These are my CDs”）、クラスメートが書いた文を読むことで、言葉は児童が語りたいことを伝えるための道具となり、何度もrecyclingすることで忘れないようになると重要さを説いている。

（２）音声指導について

Hoskinsは日本人児童へのフォニックス指導について有意義なアドバイスをしている。以下では、①効果的なプログラム、②時間配分、③教科書の3点について紹介したい。

① 日本人児童への効果的なプログラムとは

フォニックスの目的とはシンボルを単語の音と結びつけることである。一定のパターンで発音されるフォニックスワードとthe, a, is, areなどのサイトワード（sight words: フォニックスのような規則性がない単語）の組み合わせで、児童はある程度自立的に読み始めることができる。英語圏の子ども達がフォニックスを習い始める時期にはすでに2,500から5,000語を知っているが、外国語として英語を習う児童の場合、語彙力は遥かに少ない。よって、フォニックスのパターンを教える際は、彼らがすでに発音したことのある単語を使うことが大変重要である。例えば、児童が長いAの音の示し方の一つはa_eであることを習う時、彼らがすでに習ったcake, game, makeなどの単語を使うと良いし、児童らが教科書の中で、そのパターンにあった単語を見つけられることを確認するのも良いと説く。そのようにして、見慣れないが発音できそうな単語にフォニックスのルールを当てはめ、発音していく勇気を養うことを勧めている。1回の授業につき一つの新しい学びに集中できることが、児童にとって最も効果的な学習になるとし、新しいフォニックスのパターンを紹介するために新出単語を使い、その音声と意味も同時に学ばせるのは、児童にとって重荷であり長期的には効果的な学びとならないといさめている。

② 理想的な時間配分とは

理想的には毎時間読み方指導ができれば良いが、授業の時間数などの制約によっては、1週間に1度ないし1か月に1度集中的にフォニックスのスキルの授業を起こっても良い。読み方指導は他の活動と組み合わせて行うことも可能である。例えば、歌やチャンツの中に、ある単語が何回出てきたか数えさせたりすることで、スキニング（文章を素早く読むこと）のスキルを鍛え、単語を特定する際（文字間の）スペースが助けになること

を確認できたりする。また、「宝探し」として、特定の音で始まる単語を見つけたり、カードに単語を書いて児童にはそれらの単語カードを絵カードを組み合わせて一文をつくる練習をすることもできる。

③ 教科書の使い方

日本の英語教科書に載っている語彙を使ってフォニックスを教えていくことは、フォニックスの導入が組み込まれている教科書よりは困難かもしれないが可能であると述べている。児童が習っている教科書の単語を見て、フォニックスのパターンのある単語を見つけ出す。もし、cat, bat, mapのような単語があれば、児童がその単語と意味を学んだ後に、それらを使って短い/a/の音を教えることができる。レッスンの中で単語を見て、最初と最後の音を識別できるよう手助けすると良い。サイト・リーディング（即読）のスキルをつけるために、レッスンで繰り返して歌う歌やチャンツの歌詞を使うのも良い。音声を文脈（文字の前後関係）の中で教えること、読み方を文脈（センテンスの前後関係）のなかですることが、最も有効な授業時間の使い方である。

Hoskinsは、児童が自分自身で学習していくために必要な能力を身につけさせることが重要であること、そのためには教師がどれだけたくさん授業で教えたかではなく、児童が学習したことを使ってどれだけのことができるのかを見ることが重要であることを強調している。

4. 体験を通した学びで興味関心を育てる

～Teachers Learning with Childrenより

従来の英語教育とは視点を変えた教育方法についても紹介したい。O'loughlin（2009）の実践報告は、writingの初期指導の弱点を指摘し、児童達の興味関心を喚起するような楽しく体験的な指導方法について示唆に富んだ提案をしている。日本では決められた書き順で正確に書くことを覚える漢字指導に影響され、英語のwritingでも丁寧さと完璧さを求めた書き写しが繰り返される傾向があり、入門期の児童の英語学習意欲を減じうる懸念を指摘している。そこでO'loughlinは、児童の感覚を刺激し、「やりたい」と導くよう練習を工夫することを提唱する。例えば、身近な材料（塩、トウモロコシ粉、食紅など）で作ったフィンガー・ペイントで文字を書いてその触感を楽しんだり、海岸や林などに行って木切れや葉っぱ、貝殻などを見つけ、それを使って文字を形作ったりする。また、小麦粉やバターなどからクッキー生地を作りアルファベットクッキーを焼いたり、使用済みコーヒー粉を再利用したコーヒー粘土の作成と活用方法も紹介している。いずれもwriting入門期の児童にとって楽しくインパクトのある学習であろう。また、高学年については、writing練習に暗号解読などを使った謎解きの楽しさを加えることを提唱している。例えば、最も簡単な例では、A, B, C～順に1, 2, 3と番号をつけることで英語の文章を数字の暗号文に変換する。児童はその暗号を解読し、隠された英文の内容を自分たちで発見しながら宝探しゲームをして楽しみながら学習するなど、児童のわくわくした顔が浮かぶような工

夫を紹介している。

McLellan (2009) は絵本を教材に、児童達の感覚を多面的に刺激する英語教授法を紹介している。例えば、男の子がおばあちゃんと自家製ビスケットを焼く絵本Honey Biscuits (Hopper 2005) を読み聞かせた後、そのレシピの材料（小麦粉やバターなど）すべてを子ども達に自由な感性で絵に描かせ、それら材料の綴りをそれぞれ絵の下に綴ってwritingの練習をさせる。それから本物の材料を使って、児童達の前で、ビスケットづくりのプロセスを英語で紹介し、高学年の児童なら、そのプロセスを英語で文章化させてみる。そして最後は、絵本のレシピのビスケットを児童と一緒に焼いて楽しく味わうことも提唱している。単に発音や綴りを教えられるだけではなく、絵本の世界を疑似体験することで児童達の学びの喜びは高まるだろう。

5. おわりに

本稿は、日本など非英語圏で英語を教える英語母語話者の教師の実践事例を中心に紹介した。本稿で紹介した事例が、新しい視点で小学校英語の授業づくりや教材を開発するヒントになれば幸いである。2020年度から本格始動する小学校での英語教育での楽しく豊かな学びを願って、今後も現場の先生方に役に立つような好事例を発掘し紹介していきたいと思う。

参考文献

- O'Loughlin, Jan (2009) "Wonderful Words", *Teachers Learning with Children: The Newsletter of the JALT Teaching Children SIG*. Vol.13, No.2, pp.4-8.
- 鳥飼玖美子 (2014) 『英語教育論争から考える』, 松学舎.
- Hooper, Meredith (2005) *Honey Biscuits*, Lincoln Children's Books.
- Hoskins-Sakamoto, Barbara (2011) *Let's Go: Student Book with Audio*, Oxford University Press.
- Hoskins-Sakamoto, Barbara (2014) English Language Teaching Global Blog - 14 April 2014 by Oxford University Press ELT. <https://oupeltglobalblog.com/tag/barbara-hoskins-sakamoto/>
- McLellan, Naoko (2009) "Read with Me", *Teachers Learning with Children: The Newsletter of the JALT Teaching Children SIG*. Vol.13, No.2, pp.9-13.
- 文部科学省 (2013) 「第2期計画について」『教育振興基本計画』文部科学省HP
https://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/1335039.htm (2020年2月1日参照)
- 文部科学省 (2017) 『Let's Try! 1 新学習指導要領対応小学校外国語活動教材』, 東京書籍.
- 文部科学省 (2018) 「平成29年度 英語力調査結果 (高校3年生) の概要」文部科学省HP
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2018/04/06/1403470_03_1.pdf (2020年2月1日参照)
- Moon, Jayne (2005) *Children Learning English: A Guidebook for English Language Teacher*, Macmillan Books for Teachers, Macmillan Education.